

Title	サカジャウェア：ルイス・クラーク探検隊を先導したインディアンの少女
Author(s)	村上，公久
Citation	聖学院大学論叢，第 27 巻第 1 号，2014.10：113-130
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5082
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

サカジャウエア

——ルイス・クラーク探検隊を先導したインディアンの少女——

村 上 公 久

抄 録

前報⁽¹⁾では、わが国では未だほとんど知られていないルイス・クラーク探検隊 The Lewis and Clark Expedition (1804 年 5 月 14 日—1806 年 9 月 23 日)について、第三代大統領トーマス・ジェファソンの領土政策と合衆国領土意識の形成の観点から考察を試みた。同探検隊は最初の北米大陸横断を成し遂げ、現地踏査によって西部域についての多くの情報を得、独立間もないアメリカ合衆国西部域についての認識を確定したが、白人隊員のみでその歴史的探検を成し遂げたのではなく、先住民（所謂インディアン）の少女サカジャウエアの助けを得てその任務を全うすることが出来た。

先住民レミ・ショショニ族の少女サカジャウエアは、現在のアイダホ州に生まれ育ちノースダコタ州で暮らしていたが大陸北西部を踏査し太平洋に至るルート発見の任務を帯びた同探検隊に約 21 ヶ月間（1804 年 11 月 4 日から 1806 年 8 月 14 日まで）随行して、その往路と復路の白人の探検隊にとって未踏の行程部分の道案内と通訳を務めた。「発見の探検隊」The Corps of Discovery と讃えられているこの国軍の部隊を先導しアメリカ建国神話に不可欠なキャラクターとなっているこの先住民サカジャウエアについては同探検隊の関係資料以外には信頼できる資料が極めて少なく、サカジャウエアをめぐる伝記や著作また製作された商業映画の大半は出所の不明な伝承や巷説を含み多くの脚色が加えられている。本試論は、ルイス・クラーク探検隊の日記を含む諸記録と関連する諸資料によって、サカジャウエアのルイス・クラーク探検隊への具体的な貢献を明らかにすることにより、先住民・少数民族への感傷やフェミニズムからの歪んだ過度の賞賛などを除去した評価を試みた。

キーワード；サカジャウエア，ルイス・クラーク探検隊，アメリカ先住民

はじめに

金星の火山の一つに「サカジャウェア火口」と名付けられたカルデラがある*。近年、太陽系の惑星探査が進んで第三惑星地球の近傍についてはリモート・センシング（remote sensing 遠隔探査）やさらには原位置地質資料採取により各種の探査・分析が次々に実施されている。惑星表面の地形地理また地質が明らかになり主要な特徴ある地形の命名が相次いでいるが、惑星上の直径 233 km の巨大な火口は先住民の少女サカジャウェアに因んで命名されている。音楽の世界では、著名なシンガー・ソング・ライターであるスティービー・ワンダーのアルバム「キー・オブ・ライフ」の中の一曲「ブラックマン」の歌詞に『ルイス・クラーク探検隊を導いたのは赤い肌の人サカジャウェアだった』と詠われている。スティービー・ワンダーはアメリカ合衆国の形成に大きな貢献をした功労者を称える同曲中に、発明王エディソンや大統領リンカーンと並んでサカジャウェアを取り上げている。また、フィリップ・グラス作曲のピアノ・コンチェルト 2 番「ルイス・クラークに因んで」の第 2 楽章は、「サカジャウェア」と名付けられている。アメリカ合衆国の各地に「サカジャウェア」の名を帯びた学校や公共施設、多くの銅像があり、多くの小説が出版され、映画が製作されている。21 世紀の冒頭 2000 年に記念の金貨が铸造されたが、その金貨の肖像にはサカジャウェアが選ばれた。これらの命名や記念は、本試論の主題であるルイス・クラーク探検隊を助けた先住民の少女サカジャウェアに由来している。

アメリカ合衆国の建国神話のキャラクターとなってしまったサカジャウェアの実像を再現して評価することは、信頼できる歴史資料が極めて限定されており、人物像が多様な伝説に埋め尽くされているために極めて困難であるが、上述のように現代のアメリカ合衆国で高い再評価を受けているサカジャウェアについて粉飾を取り除いた理解を試みるのが本試論の趣旨である。

探検隊との出会いと 21 ヶ月間の随行

「ルイス・クラーク探検隊」に触れた先の試論「アメリカ合衆国の領土意識形成 —ルイス・クラーク探検隊 領土意識の形成を促した西部探検」⁽¹⁾ において「アメリカ合衆国市民を形成する三つの源流」について述べたが、「三つの源流」とは、北アメリカ大陸の先住民（インディアン）、ヨーロッパから移住した白人、アフリカからの黒人であるが、サカジャウェアは建国期に白人に関わり国軍の探検隊に貢献した先住民である。

* 「サカジャウェア火口」：スペースシャトル・アトランティスがミッション STS-30 により放出した金星探査機マゼラン（スペースシャトルによる最初の惑星探査機放出、通称 Venus Radar Mapper）により同カルデラが発見された。探査機マゼランは金星の極軌道に投入（1990 年）されレーダーにより金星の地形観測を実施した。

当時ミシシッピ川とロッキー山脈にはさまれた平原地帯は、ルイジアナと呼ばれていた。ルイス・クラーク探検隊の出発の地はセントルイスであった。ミズーリ州セントルイス市（1764年フランス人によって毛皮の取引所が開設されフランス国王ルイ9世 聖王サン・ルイ Saint-Louis に因んで命名された）には、今日西部開拓の出発点であったことを記念する高さ192mの巨大なゲートウェイアーチ The Gateway Arch がそびえ立っているが、それは合衆国を西部に拡張した大統領トーマス・ジェファソンを称え、ルイス・クラーク探検隊を嚆矢とする白人たちの西部開拓を称えるシンボルとしてそびえている。この現在のセントスイス市付近から出発したルイス・クラーク探検隊が探検開始半年後に出会い以後大きな助けとなったのが先住民の少女サカジャウエアである。

同探検隊は1804年5月14日セントルイス近くの基地を出発し、三隻の船に分乗して、ミズーリ川を遡上した。冬が近づく10月下旬によく先住民マンダン族の居住地で越冬基地となる砦を造営することになる地点に到着した。探検隊はここで「マンダン砦」を造営し越冬の準備に入ることになる。

探検隊は1804年8月下旬に大平原地帯に入った。周囲の動物相も植物相もそれまでのものとは違っていた。9月7日に初めて目撃したプレーリー・ドッグ Prairie dog (genus *Cynomys* で現在4種が確認されている) は、この探検隊の西部域での発見の象徴として現在もしばしば言及されている。

さらにミズーリ川を北上し続け10月21日に初雪があった。隊長クラークは「朝、降雪があった。午前中継続した。」と記している。冬が近かった。探検隊はマンダン族の集落に入った。現在のノースダコタ州ビスマーク市の近辺で、三つのヒダツァ族の集落と二つのマンダン族の集落、合わせて五つの集落から成っていた。このマンダン・ヒダツァ集落は先住民だけではなくフランス系カナダ人の毛皮商人（サカジャウエアの夫シャルボノーもその一人である）やイギリス人の交易商人が多数行き交っている当時ミズーリ川上流域の交易の中心地で、アメリカ合衆国にとっての認識域の最北西の地点だった。

探検隊がマンダン・ヒダツァ集落に入った頃、季節は既に初冬になっていた。厳冬季にさらに前進を続けることも、セントルイスへ引き返すことも、どちらも不可能で越冬基地を造営することになった。隊はフォート・マンダンの地点に到着して同地で越冬することを決め、10月30日から国軍の越冬基地の候補地を求めて踏査を始め11月2日にサイトを決定した。ルイス隊長は「われわれの隣人に因んでフォート・マンダン（マンダン砦）と命名した。」と記している。隊は1804年11月から12月にかけて砦を造営した。11月5日の夜、オーロラ現象が観察された。クラークは「白い帯状の光り輝くもので、光の柱が浮かんでは消えた。」と記している。12月に入って日最低気温が氷点下10℃以下になる日が続いた。12月6日-12℃、7日-18℃、11日は-29℃、12日-38℃、17日には氷点下41℃まで下がった。

この越冬の期間に、ルイスとクラークは出発からマンダン到着までの探検記録と資料や標本の整理、地図の作製、先住民との外交と情報収集を行っていたが、その間マンダン砦を訪れたカナダ人毛皮商人シャルボノーの妻である当時16才だった先住民の少女サカジャウェアに出会った。彼女の優れた資質を見抜いたルイスとクラークは、以降の未踏の地での道案内と探検途上で出会うであろう先住民各部族との外交のため、彼女を通訳ガイドとして夫シャルボノー諸共雇い入れた。サカジャウェアのルイス・クラーク探検隊のための働きは通訳に止まらず、彼女自身の部族を含め複数の先住民部族との交渉、馬の調達、野草が食用に適か不適かの判別、また隊が進路に迷った際に正しい方向を示すなど顕著な貢献があった。ルイス・クラーク探検隊に同行したショショニ族のサカジャウェアは、ボウハタン族のボカホントスと並んで合衆国の歴史に記憶されている優れた先住民女性の代表となっている。

サカジャウェアの出身部族ショショニについて以下に略説する。

サカジャウェアは、北米先住民の北方ショショニ部族の支族である The Lemhi Shoshone レミ・ショショニ族に属するが、「サーモンを食べる人」Salmon Eaters を意味する Akaitikka あるいは Agaideka と呼ばれている（他に同様の部族の呼称に Buffalo Eaters や Mountain Sheep Eaters などがある）。

ショショニ族の部族名“Shoshone”は同部族の言語で大平原地帯に生える背丈の高い草本 sonipe の複数形である。大平原地帯に居住する先住民のいくつかの部族はこの部族ショショニ族を「背丈の高い草で編んだ円錐形の家に住む」部族と呼んでいた。ショショニ族は自らについてはヒトを表す Newe と言う。

（図1）は、ルイス・クラーク探検隊 成果地図（1814）（引用文献1中の（図3））の部分拡大でサカジャウェアが属するショショニ族（ショショニ・インディアン）とヒダツァ族の集落の居住域



（図1）地図 ショショニ族居住地

ルイス・クラーク探検隊 成果地図（1814）部分

に相当する部分である。

ルイス・クラーク探検隊の日誌には、ショショニが「蛇」を意味すると記されており地図（図1）中に「ショショニ族すなわちスネーク・インディアン」“Shoshones or Snake Indians”と記入されている。「ショショニ」を「蛇」と解したこの呼び方は、先住民のサイン・ランゲージ（異なる言語の部族間で用いられた先住民の共通語としての手話）で本来は「サーモン」を表現する魚が泳いでいる様を表現する手の動きが「蛇が地を這う」を意味していると誤解されたことに起因すると思われる。サーモンは大平原地帯で暮らす部族にとっては未知の食べ物であった。

なお、同地図（図1）に部族人口は2千人 2000 souls と記入されている。

サカジャウエアの生誕地、彼女の部族の居住地域はマンダン・ヒダツァ集落域である。サカジャウエアは1788年に現在のアイダホ州テンドイ地区 Tendoy, Idaho で生まれたと推定するのが妥当と思われる。テンドイはレミ・ショショニ族の族長の名に由来する。サカジャウエアおよびルイス・クラーク探検隊と関係する複数の自治体がサカジャウエアの出身地を名乗っているが、それらの主張は全て明確な根拠に欠ける。

サカジャウエアは10～12歳の頃、ショショニ族とヒダツァ族との部族間の戦闘で勝利したヒダツァ族に戦利品として略奪され、自分の出身部族とは生き別れになった。他部族の中で暮らしていたとき、毛皮取引のためマンダン族と交渉があったフランス系ケベック出身の毛皮商人トゥーサ



（図2）マンダン族集落 住居

絵画 マンダン族 オ・キー・パの儀式 George Catlin* 1832

* George Catlin については、村上公久「国立公園の起源 ―国立公園の創設を導いた画家 G. Catlin」聖学院大学論叢 vol. 23 No. 1, 2010

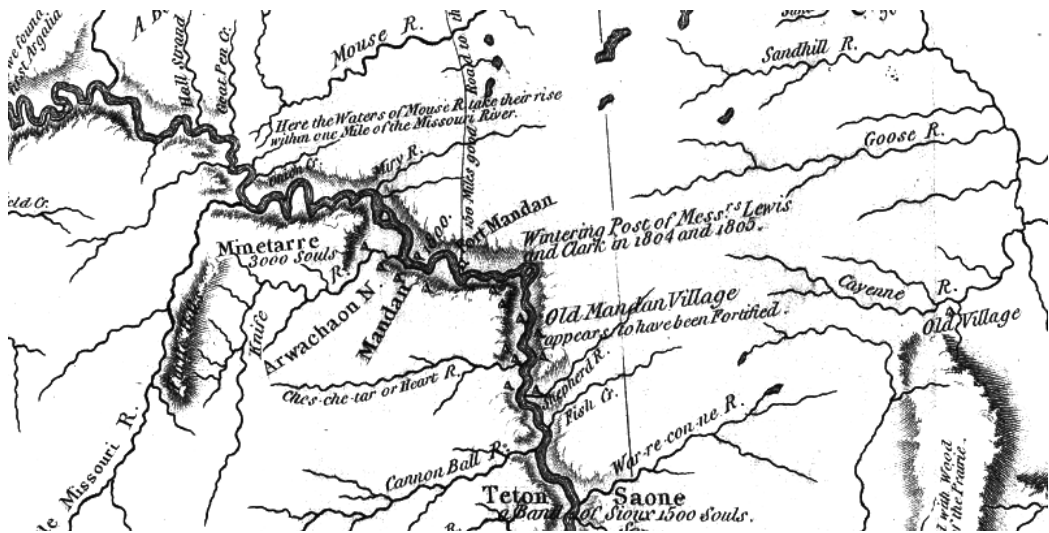
ン・シャルボノーの妻となった。トゥーサン・シャルボノーは、1659年フランスからモントリオールに移住したシャルボノーの一家に1767年3月20日ケベックのボーシェビルで生まれた。当時マンドンの地域で毛皮取引をしていたシャルボノーはセントルイスから北上してきたルイス・クラーク探検隊と出会う。サカジャウェアはシャルボノーの複数の妻の一人であった。妻となったのは、シャルボノーがヒダツァ族の言わば奴隷であったサカジャウェアを金品で買ったという多くの文献にある説の他に、カードゲームの賭け代としてシャルボノーの妻の一人となったという説もあり詳細は不明である。シャルボノーの複数の妻については、両隊長ルイスとクラークが初めてシャルボノーに会った時には、シャルボノーはサカジャウェアの他に先住民の妻リトル・オッター（可愛いカワウソ）Little Otterを同道していたことが記録されている（隊日誌1804年11月4日）。サカジャウェアは身重であり、探検隊がマンドン・ヒダツァ集落に越冬基地を築いて一回目の越冬をした時期の1805年2月11日に男児を出産した。

サカジャウェアは、ルイス・クラーク探検隊に加わったことによって道案内の途上で子供の頃ヒダツァ族に略奪されて以来分かれていた自分の部族レミ・ショショニ族と接触し、幼い時の親友と実兄に劇的に再会する。

ルイス・クラーク探検隊はロッキー山脈を越えるために必須の馬を手に入れるためレミ・ショショニ族と交渉し、その際にヒダツァ族に戦利品として略奪された時に共に略奪され自力で脱出逃走した同じレミ・ショショニ族の女性と再会し、さらに相手のレミ・ショショニ族一団を率いていた族長が自分の実兄カメアワットであることが判り劇的な再会をすることが出来た。各種のサカジャウェアについての伝記ものや小説では、この兄妹の再会場面をクライマックスとして描いているものが多い。特に映画では、白人たちを導くインディアン女性が大自然の中で生き別れた肉親と再会するという劇的な場面を描くのに力点を置いている。

（図3）の地図は、（図1）の地図と同様にルイス・クラーク探検隊 成果地図（1814）の別部分で、越冬基地フォート・マンドン（マンドン砦）の位置を含む部分の拡大である。（図3）上の中央部分にMandan（部族名で居住地域）Fort Mandan（探検隊が造営したフォート・マンドン）と記入されている。往路に探検隊が陸軍の駐屯砦として造営した越冬基地は、隊が復路に同じ場所を通過した際には火災（原因は不明）により焼失していてその位置を正確に確認できなかったこともあって、現在ではフォート・マンドンの位置の特定が困難である。また過去2百年間に河川の流路が変動していることもあって砦の跡地の推測が困難であるが、諸資料を用いて測量すればその推定位置は北緯47度17分53秒 西経101度5分14秒の地点である。

このフォート・マンドン造営の期間、両隊長は先住民との外交に従事した。ミズーリ川東岸のカウンシル・ブラフス Council Bluffs*（会見の崖）でルイスとクラークは初めてインディアン代表团と会見した。同地名はこの会見に因んで命名されている。



(図3) マンダン集落・フォート・マンダン Fort Mandan の位置 (地図中央)

ルイス・クラーク探検隊 成果地図 (1814) 部分拡大

ルイス・クラーク探検隊への具体的な貢献

サカジャウエアのルイス・クラーク探検隊の成功を助けた貢献については、さまざまな記述があり、また通俗的な小説や映画にも多く描かれている。(音楽・映画については末尾の「資料」一覧)

探検隊にとってサカジャウエアが必要であった理由は、現地先住民との交流での通訳と未踏域での道案内であった。探検隊は、マンダンでの最初の越冬以降の行程で隊にとっては未踏の、また地理情報がほとんど無いマンダン以西の地域に向かうに当たっての道案内を求めている。セントルイスを3隻の船で出発し航行を続けていた探検隊は、往路途上で太平洋岸に到達するための水路が無いことを確認した時点でそれまでの遡行を止め陸路を取ることとなった。その際探検隊は、先住民が「巨大な岩」と呼ぶロッキー山脈を越えるのに不可欠な先住民からの馬の調達とその交渉のための現地通訳を探していた。

ショショニ族の居住地は周辺の他の部族の居住地に比して土地の生産性が低かったため自生する植物の採取や天然物の利用についてもまた耕作についても絶えず創意工夫が不可欠で、詳細な知識の蓄積と経験が豊富だった。ヒダツァ族に略奪されるまでショショニ部族の中で育てられ暮らしていたサカジャウエアは、現地食料調達など狩猟採取の知識と経験が豊かで、道案内や通訳の他に隊

* この会見の地点は、現在のカウンシル・ブラフス市ではない。オマハ市(ネブラスカ州、ミズーリ川西岸、)と川を隔てて対岸にある現在のカウンシル・ブラフス市(アイオワ州ポタワタミー郡)ではなく、その約30km北である。後に大統領アブラハム・リンカーンは西部への玄関口 Gateway to the West と称されるこの地を重視し、現在のカウンシル・ブラフス市を大陸横断鉄道の東の起点と定めた。



(図4) 絵画 ルートを教えるサカジャウエア
モンタナ州 グレイト・フォールと推測

員たちの命を支える食料調達において貢献した。

サカジャウエアは、ルイス・クラーク探検隊がロッキー山脈を越えるために馬を調達しなければならない際に大きな貢献をした。隊はショショニ族から馬を購入するに当たって、まさにその部族出身のサカジャウエアを通訳に得た。この交渉時に彼女が実兄と劇的な再会をしたことは既述のとおりであり種々のサカジャウエア物語におけるクライマックスの場面となっている。

1805年5月14日航行中の船に側面から強烈な突風が吹きつけ船が転覆する危機に襲われた。この時サカジャウエアは沈みかけていた船の後部に留まって貴重な積載物が船から流失しそうになるのを必死に押さえていた。この決死の働きのおかげで資料・物資が確保された。ルイス隊長は5月16日の日誌に「サカジャウエアが見せた精神的な強さと決断は、災難に見舞われた船に乗っていたどの兵士にも決して引けをとらないものだった。サカジャウエアは、貴重な荷物のほとんどすべてを救ってくれたのだ。」と記している。

道案内において特記すべき貢献は、サカジャウエアが復路でボーズマン峠 Bozeman Pass が大陸分水嶺を超える最適の地点であることを的確に示したことである。(ボーズマン峠は、現在のボーズマンとリビングストンとの両市の間、インターステートハイウェイ90号線沿いにある。後にアメリカ北部を横断する最初の大横断鉄道は、路線にこの峠の地点を選んで敷設された。(図5)、(図6)) ルイス・クラーク探検隊は、二手に分かれて1806年7月3日出発した。復路クラーク隊長がサカジャウエアを含め分隊を率いて7月15日ボーズマン峠を越えた。クラークの分隊はイエローストーン川とその河口位置を踏査するために、ルイスが率いるミズーリ川を辿る分隊と分かれて復路を取り、両隊はイエローストーン川河口で無事合流した。サカジャウエアのルートガイドが



(図5 左) 写真 ボーズマン峠 Bozeman Pass 2006 年撮影

(図6 右) 修正写真 同 峠 鉄道敷設後

無ければ、極めて困難な行程であった。

サカジャウエアの貢献で見落とされがちな点は、女性でありまた母であったことである。これにより隊が進行する先々で先住民に平和的な印象を与えた。白人のルイス・クラーク探検隊に先住民女性が含まれていたこと、さらにサカジャウエアが隊に随行した行程は彼女がフォート・マンダンで出産した乳児を伴っていたことが戦闘部隊ではない平和的なグループであることを無言の中に先住民に示していた。このために長い行程中に現地先住民との摩擦は1806年7月27日に起こったブラックフィート族との衝突のただ一度限りで、母であったサカジャウエアがルイス・クラーク探検隊に平安な旅を与えていた。

評価と歪んだ賞賛

作られたイメージ

しばしば「インディアンのプリンセス」と呼ばれるポカホントスは、首都ワシントンの連邦政府議事堂のホール正面に掲げられた絵画「洗礼を受けるポカホントス」に、野蛮の中にありながら白人に忠実な「望ましい良いインディアン」のイメージとして描かれている。結核で22才の生涯を閉じたポカホントスは、ウォルト・ディズニー社のアニメーション映画にも「望ましい良いインディアン」のイメージを保って表現されている。

ポウハタン族のポカホントスと同様に、サカジャウエアについても白人の手先となり先住民への侵略の案内人になったとの批判が根強い。ポカホントスは白人たちによって大英帝国に連れて行かれ新大陸アメリカの神話化された有名人となったが、サカジャウエアが知られるようになった契機は、女性歴史作家エヴァ・ダイによるサカジャウエアの「発見」である。

エヴァ・ダイによるサカジャウエアの「発見」

合衆国の歴史に埋もれていたサカジャウエアを「発見」したのは、エヴァ・ダイ Eva Emery Dye (1855-1947) である。この歴史作家で婦人参政権運動家は、ルイス・クラーク探検隊の二人の隊長の中の一人ウィリアム・クラークと探検隊には加わらなかったウィリアムの弟ジョージに焦点を当てその兄弟の伝記の著作を試みていたが（ジェファソンが1783年にウィリアム・クラークの弟ジョージに西部探検の指揮を依頼した経緯は前報⁽¹⁾に既述）調べているうちに同探検隊の行程の一部に随行していた先住民インディアンの女性がいたことに気付いた。その著作 *Conquest: the True Story of Lewis and Clark* (1902)⁽³⁾ において、それより半世紀以前にいたルイス・クラーク探検隊の成功を導いた先住民の女性を「発見」しサカジャウエアの探検隊への貢献は両隊長の壮挙に匹敵すると絶賛してヒロインに祭り上げた。

エヴァ・ダイは自身の著作 *Conquest* が大きな評判になったことを「世を挙げて私が作ったヒロイン“サカジャウエア”の虜になった。」⁽²⁾と回顧している。サカジャウエアがインディアンのプリンセス扱いされ始めたのはこのエヴァ・ダイの著作以降の20世紀に入ってからである。

歪んだ賞賛

サカジャウエアは先住民であり同時に女性であり、また白人の建国神話に関わる人物であるが故に、少数民族差別論とフェミニズムとの双方の問題意識を強く刺激する。先住民と女性との重複点にいるサカジャウエアは、アメリカ合衆国における被差別者問題を扱う場面で格好のキャラクターであり続ける。さらにまたサカジャウエア自身の出自である先住民からも「白人の手先」と見做されて批判されることが頻繁である。

サカジャウエアを主人公にした通俗伝記小説には、彼女を白人にとって従順でかわいいインディアンのプリンセスに仕立てて、サカジャウエアと隊長ルイスとは恋仲になっていたというポカホンタスとジョン・スミスについての同様の俗説を連想させるものまである。

サカジャウエアへの逸脱した歪んだ評価は、場合によっては客観性を欠いた過剰な評価は、主として二つのグループからのものである。一つは先住民内外の「先住民の権利」を主張する人々で、サカジャウエアの貢献無くしてはルイス・クラーク探検隊の成功は無かったにもかかわらずその後の西部開拓のプロセスでの白人の先住民への扱いは強く批判されるべきもので、この点についてのサカジャウエアへの批判は、彼女が白人による先住民に及んだ長年に亘る搾取と虐待を導入する役割を果たしたというものである。これは先住民の中であって「先住民への迫害」を糾弾する現代の先住民とその同調者である白人の間でしばしば起こる批判である。もう一つは「女性の権利」を主張する人々のフェミニズムの立場からの「従順で素直に従う」サカジャウエアへの批判である。両者にはいずれも、サカジャウエアの限定された局面を切り取って自らの主張に沿わせてサカジャウエアを利用する傾向がある。「従順で素直に従う」サカジャウエアは実際に両隊長が持っていた

印象であるが、通常は従順で素直なサカジャウエアがはっきりと自分の主張を表明して隊長と周囲の白人たちを大いに驚かせたことが隊の日記に記されている。二度目の冬二つ目の越冬基地としてコロンビア川河口部の南岸（左岸）現在のオレゴン州アストリア市付近に造営したフォート・クラツォップで、ある日近くの浜（太平洋岸）に「巨大な魚」（クジラ）が打ち上げられたという情報を得て、隊員たちが海岸に見に行こうとしてまた鯨油採取の目的もあって、サカジャウエアには皆に留まるように命じたとき、彼女はこの時ただ一度昂然と自分も見に行くとして強く主張し実際に浜へ駆け付けた。ルイス隊長は1806年1月6日の日記に、普段は控えめで「従順で素直に従う」サカジャウエアのこの時の態度を、驚きをもって記している。

ケスラー Kessler, Donna Barbie は、著書 *The Making of Sacagawea*⁽⁵⁾ において1805年から現代までのサカジャウエアに関する歴史料書、またサカジャウエアを扱ったフィクション、演劇、映画、彫刻、絵画などを調べ、西部開拓の歴史の中で特にアメリカ合衆国の基礎を支えるのに不可欠な神話 Manifest Destiny「明白な使命」の理念との関連において、何故サカジャウエアの物語が消滅することなく長きにわたって語り続けられながら進化したのかを明らかにしようと試みている。ケスラーは、Manifest Destiny というスローガンは政治に使われたが、このよく知られた西部開拓を導いた政治理念を象徴している人物の中で頻繁に想起されてきたのが「良いインディアン」サカジャウエアだったと指摘する。（Manifest Destiny という言葉そのものは政治家に由来するものではなくジャーナリストのジョン・L・オサリバン John Louis O'Sullivan の着想によるものである。）

サカジャウエアへの賞賛の過剰な部分は、さらに近現代の人権意識に基づく特に女性の権利と少数民族の権利を強く意識してサカジャウエアを賛美する言説には、的外れなものが多い。それらは彼女と北米先住民の数千年に及ぶ生活の地域に突如許可も無く踏み入った「三つの源流」中の白人による、西部開拓の過程で先住民に及んだ長年に亘る搾取と虐待への後ろめたさを糊塗する歪んだ賞賛である。

現在ではアメリカ合衆国の18か所（2014年時点）にサカジャウエアの彫像がある。それらの多くは、白人から見た「忠実な良いインディアン」であるかまたは「自立した女」のイメージを帯びた彫像である。先住民の衣服をまとい髪形も子供を負っている背負子も先住民のものでありインディアン女性の様態であるが、顔つきや体つきは白人の女であるものが多く、そして近年の彫像に共通している特徴は白人の自立した女を表現したことが多いことである。例えば（図7）はその典型で女性彫刻家 Alice Cooper によるサカジャウエアの彫像であるが、それに比して（図8）は先住民の女性を描いたものであってサカジャウエアの実像を表現しようと試みている。サカジャウエアについての評価は、その時点での白人の先住民観を反映して今後も変化し続けるであろう。



(図7 左) サカジャウエア像 オレゴン州 ポートランド市 ワシントン公園

(図8 右) サカジャウエア像 モンタナ州立大学所蔵 モンタナ州 ミズーラ市

探検隊随行以降の消息と死

フォート・マヌエル（現サウスダコタ州）の職員ジョン・C・ルティッグ John C. Luttig が1812年12月20日の業務日誌に「今日の夕方、シャルボノーの妻、スネーク族のスクウォー（女房）が、腐敗熱（コレラ）で死んだ。この砦で一番素晴らしい女性だった。年齢は25才ぐらいだった。元気な女の赤ちゃんを残した。」と記している。

サカジャウエアを巡る伝記、伝記小説、各種地方史や州・市町の郷土史ウェブ・サイトなどに「サカジャウエアは百才まで生きた」という記載が散見される。「百才説」の起源は、ワイオミング大学図書館司書で郷土史家また社会活動家でもあったグレイス・ヘバード Grace Raymond Hebard (1861-1936) の著作 *Sacajawea* (1933)⁽⁴⁾ であるが、前述のフォート・マヌエルの職員による日誌中のサカジャウエアであると特定できる先住民女性の死亡の記載は歴史記録として信憑性がある。数多くの長寿の巷説が今日にも流布しているのは、先住民に生まれ白人の男たちとの遭遇故に波乱に満ちた人生を送ることになりその生涯をおよそ25才前後で閉じたサカジャウエアに寄せる白人からの屈曲した同情に起因するものが少なくはないであろう。

サカジャウエアの名前と綴り字についてルイス・クラーク探検隊の日誌には、その音をアルファベットで記しているが、11の異なる綴り字で記録されている。本試論ではショショニ族の言語を尊重し、また記念貨幣の金貨 *The Sacagawea dollar*（後述）の標記にもあり、ナショナル・ジェオグラフィック・ソサエティ *National Geographic Society* も採用している *Sacagawea* の綴り字を用いた。

終わりに

軍艦や戦艦に女性の名を付けることは稀であるが、アメリカ合衆国海軍に「サカジャウエア」と名付けられた「ルイス・クラーク級」貨物弾薬補給艦 USNS *Sacagawea* (T-AKE-2) がある。2006 年進水 2007 年 2 月 27 日就役以降任務に就いている同艦は 14 艦から成る「ルイス・クラーク級」中の「ルイス・クラーク」に次ぐ 2 番艦である*。艦のモットーとして「先導」“Leading the Way”を掲げ、ルイス・クラーク探検隊に随行して道案内し通訳を務め同探検の成功に不可欠であったサカジャウエアの大きな貢献を、合衆国海軍は軍艦の命名によって称えている。合衆国陸軍の正規部隊であったルイス・クラーク探検隊の道案内から約 2 世紀を経た 2001 年、ビル・クリントン大統領はサカジャウエアに合衆国陸軍の特別階級「正規軍名誉軍曹」の称号を与え顕彰した。

1954 年ルイス・クラーク探検隊 150 周年に発行された記念切手には、絵柄のサカジャウエアが描かれていてサカジャウエアが「発見」されてから半世紀経った頃の彼女への評価が表れている。

21 世紀を迎える意識が高まった前世紀の終わり頃、1997 年アメリカ合衆国 1 ドル記念硬貨発行条例 (the United States \$1 Coin Act of 1997) に基づき造幣局 (United States Mint) は、翌 1998 年に 1 ドル金貨を 21 世紀の冒頭に発行することを決定し、ロバート・ルービン財務長官は 9 名の金貨のデザイン委員を招集してその 2000 年記念合衆国金貨のモチーフには歴史上の女性の肖像が相応



(図 9 右) 探検隊 150 周年記念切手 1954 年
川岸先頭から三人目がサカジャウエア

* 軍艦サカジャウエア:「ルイス・クラーク級」物資輸送艦 2 番艦で排水量約 4 万トン、二機の大型ヘリコプター搭載可能で作戦行動時に強襲揚陸艦 USS *Tarawa* (LHA-1) などに随伴して補給支援する任務などに就く。輸送艦「サカジャウエア」は合衆国海兵隊「海上事前配備作戦」の一環である「自由の旗」演習がフィリッピン海域で実施された際に参加している。なお、「ルイス・クラーク級」貨物弾薬補給艦の 9 番艦は 1853 年に浦賀に來航したペリー提督 Matthew Calbraith Perry (階級について正しくは提督 admiral ではなく代将 commodore) に因んで「マシュー・ペリー」USNS *Matthew Perry* (T-AKE-9) と命名されている。同艦マシュー・ペリーは 2010 年就役し翌 2011 年東日本大震災の際、米軍による救援活動「トモダチ作戦」に出動し被災地の救・支援に貢献した。



(図10) 記念1ドル金貨 表・裏* 2000年

しいと指示した。同委員会は幾多の候補に挙げた女性の中から最終的にサカジャウエアを選んだ。モチーフの制作にはインディアンの女性がモデルに選ばれて金貨の肖像が刻まれた。およそ24才で生涯を終えたこの先住民の女性は、サカジャウエア・ドル The Sacagawea Dollar と呼ばれている記念金貨の幼児を負った肖像に、その面影を留めている。(図10)

「アメリカ合衆国市民を形成する三つの源流」、ヨーロッパから移住した白人、北アメリカ大陸の先住民、アフリカからの黒人の中、白人の自由と独立と平等は他の二者である先住民と黒人の不自由、服従、不平等の上に築かれてきた。ルイス・クラーク探検隊から約百年後、サカジャウエアの出身部族ショショニは、先祖代々暮らし続けてきた土地を白人たちに追われ約320 km 南のフォート・フォール居住地へ強制移住させられた。同部族は現在かれらの居た聖なる故郷の地へ戻って行くことを切望している。

引用文献・資料

- (1) 村上公久「アメリカ合衆国の領土意識形成 —ルイス・クラーク探検隊 領土意識の形成を促した西部探検」聖学院大学 論叢 26(1), 2013
- (2) Clark, Ella E. and Edmunds, Margot *Sacagawea of the Lewis and Clark Expedition*, University of California Press, 1983 page 94.
- (3) Dye, Eva Emery *The Conquest: The True Story of Lewis and Clark*. Chicago: AC McClurg, 1902.
- (4) Hebard, Grace Raymond *Sacajawea: A Guide and Interpreter of the Lewis and Clark Expedition*, Arthur H. Clark Company, 1933
- (5) Kessler, Donna Barbie *The Making of Sacagawea A Euro-American Legend*: Quality Paper, 1998.

参考文献・資料

明石紀雄「ルイス＝クラーク探検 —アメリカ西部開拓の原初物語」, 世界思想社 2004
Adler, David. *Picture Book of Sacagawea*. New York: Holiday House, 2000.
Bakeless, John, ed. *The Journals of Lewis and Clark*. New York: Mentor Books, 1964.

* 裏面は2000年発行時のデザインから2014年まで7種あって、上図右の裏面は最初に発行されたもので2000～2008年にわたって鑄造された。

- Clark, Ella E. and Edmunds, Margot *Sacagaewa of the Lewis and Clark Expedition*, University of California Press, 1983
- Coues, Dr. Elliott, ed. *The History of the Lewis and Clark Expedition*. New York : Dover Publications, 1893.
- Defenbach, Byron. *Red Heroines of the Northwest*. Caldwell : Caxton Publishers, Ltd., 1930.
- Donna Barbie Kessler *The Making of Sacagaewa A Euro-American Legend* : Quality Paper, 1998.
- Dye, Eva Emery. *The Conquest : The True Story of Lewis and Clark*. Chicago : AC McClurg, 1902.
- Emmons, Della Gould. *Sacajawea of the Shoshones*. Portland : Binfords and Mort, 1943.
- Frazier, Neta Lohnes. *Sacajawea : the Girl Nobody Knows*. New York, D. McKay Co., 1967.
- Fresonke, Kris and Spence, Mark, ed. *Lewis & Clark Legacies, Memories and New Perspectives*. Berkeley : UC Press, 2004.
- Harper, Ida Husted. *History of Woman Suffrage*, volume 6. (New York : J. J. Little & Ives, 1922), p. 540.
- Hebard, Grace Raymond *Sacajawea : A Guide and Interpreter of the Lewis and Clark Expedition*, Arthur H. Clark Company, 1933
- Howard, Harold P. *Sacajawea*. Norman, Okla. : University of Oklahoma Press, 1979.
- Hueston, Ethel. *Star of the West : The Romance of the Lewis and Clark Expedition*. New York : Bobbs-Merrill Co., 1935.
- Kessler, Donna J. *The Making of Sacagaewa : a Euro-American Legend*. Tuscaloosa, Ala. : University of Alabama Press, 1996.
- Moulton, Gary, ed. *The Journals of the Lewis & Clark Expedition*. Lincoln : University of Nebraska Press, 2003.
- Peattie, Donald. *Forward the Nation*. New York : G. P. Putnam's Sons, 1942.
- Schultz, James. *Bird Woman (Sacajawea) : The Guide of Lewis and Clark*. Boston : Houghton Mifflin, 1918.
- Waldo, Anna Lee. *Sacajawea*. New York : Avon Books, 1978.
- Welden, Amelie. *Girls Who Rocked the World : Heroines from Sacajawea to Sheryl Swoopes*. Milwaukee, WI : Gareth Stevens Pub., 1999.

ルイス・クラーク探検隊についての資料・文献は、
 引用文献・資料(1) 村上公久「アメリカ合衆国の領土意識形成 ―ルイス・クラーク探検隊 領土意識の形成を促した西部探検」聖学院大学 論叢 26(1), 2013
 の末尾「資料・文献」を参照。

シヨシヨニ部族 Shoshone 文献

- Blackhawk, Ned *The Shoshone (Indian Nations (Austin, Tex.))* Library Binding - January 2000
- Crum, Steven J. *The Road on Which We Came : A History of the Western Shoshone/Po'I Pentun Tammen Kimmappah*
- Dayton O., Hyde *The Last Free Man : The True Story Behind the Massacre of Shoshone Mike and His Band of Indians in 1911*
- Ditchfield, Christin *The Shoshone (True Book : American Indians)* (School & Library Binding - September 2003)
- Hebard, Grace Raymond, Clemmer-Smith, Richard O. (Introduction) *Washakie : Chief of the Shoshones* 1995
- Horne, Esther Burnett, McBeth, Sally J. *Essie's Story : The Life and Legacy of a Shoshone Teacher*

(*American Indian Lives*) 1998

Lowie, Robert H. *Northern Shoshone* Original Release Date : June 1909

Keller, Kristin Thoennes *The Shoshone : Pine Nut Harvesters of the Great Basin (America's First Peoples)* (School & Library Binding - January 2004)

Mattern, Joanne *The Shoshone People (Native Peoples)* (School & Library Binding - January 2001)

McKinney, Whitney *History of the Shoshone : Paiute of the Duck Valley Indian Reservation*

Moss, Nathaniel B. *The Shoshone Indians (Junior Library of American Indians)* (Library Binding - June 1997)

Ottogary, Willie, et al *The Washakie Letters of Willie Ottogary, Northwestern Shoshone Journalist and Leader, 1906-1929* 2000

Rupert, Weeks, et al *Pachee Goyo : History and Legends from the Shoshone*

Sagwitch : *Shoshone Chieftain, Mormon Elder, 1822-1887* 1999

Shaughnessy, Diane, et al *Sacajawea : Shoshone Trailblazer (Famous Native Americans)* 2001

Smith, Anne M. (Editor) *Shoshone Tales (University of Utah Publications in the American West), Series : University of Utah Publications in the American West (Book 31)*, University of Utah Press 1993

Stamm, Henry E., IV *People of the Wind River : The Eastern Shoshones, 1825-1900* 1999

Vander, Judith *Songprints : The Musical Experience of Five Shoshone Women (Music in American Life)* 1996

Vander, Judith *Shoshone Ghost Dance Religion : Poetry Songs and Great Basin Context (Music in American Life)* 1997

Vander, Judith *Ghost dance songs and religion of a Wind River Shoshone woman*

Wilson, Elijah Nicholas, et al *The White Indian Boy : The Story of Uncle Nick Among the Shoshones* 2001

フェミニズムの観点からのサカジャウエアについての著作・文献

Frazier, Neta Lohnes. *Sacajawea : the Girl Nobody Knows*. New York, D. McKay Co., 1967.

Harper, Ida Husted. *History of Woman Suffrage*, volume 6. (New York : J. J. Little & Ives, 1922), p. 540.

Howard, Harold P. *Sacajawea*. Norman, Okla. : University of Oklahoma Press, 1979.

Kessler, Donna J. *The Making of Sacagawea : a Euro-American Legend*. Tuscaloosa, Ala. : University of Alabama Press, 1996.

Welden, Amelie. *Girls Who Rocked the World : Heroines from Sacajawea to Sheryl Swoopes*. Milwaukee, WI : Gareth Stevens Pub., 1999.

音楽・映画

音楽.

・ステイービー・ワンダー Stevie Wonder のアルバム「キー・オブ・ライフ」the Key of Life の中の一曲「ブラックマン」"Black Man" の歌詞に『レイス・クラーク探検隊を導いたのは赤い肌の人サカジャウエアだった』と詠われている。

・"Piano Concerto No. 2 after Lewis & Clark", by Philip Glass, the second movement : "Sacagawea".

・Schoolhouse Rock song *Elbow Room* に、サカジャウエアは、レイス・クラーク探検隊の道案内をし、隊は太平洋岸に到達することが出来たと歌われている。

(You Tube : <https://www.youtube.com/watch?v=FfoQBTPY7gk&feature=kp>)

映画

Night at the Museum 3: Secret of the Tomb (2014) 主演 Mizuo Peck

Night at the Museum 2: Battle of the Smithsonian (2009) 主演 Mizuo Peck

The Spirit of Sacajawea (2007) 主演 Tantoo Cardinal

Night at the Museum (2006) 主演 Mizuo Peck

Bill and Meriwether's Excellent Adventure (2006) 主演 Crystal Lysne

Journey of Sacagawea (2004) 主演 Rita Coolidge

Jefferson's West (2003) 主演 Cedar Henry

Lewis & Clark: Great Journey West (2002) 主演 Alex Rice

The Far Horizons (1955) 主演 Donna Reed

Sacagawea : A Native American Girl who Guided the “Corps of Discovery Expedition”

Kimihisa MURAKAMI

Abstract

The Lewis and Clark Expedition (14. May 1804–23. Sept. 1806) was assisted by a native American girl named Sacagawea. Sacagawea is one of the most renowned figures of the American West. She was originally from the Shoshone tribe, had been captured by the Hidatsa when she was a child, and eventually became one of the wives of a French fur trader. In 1805 Sacagawea, with her French husband, joined Lewis and Clark as the expedition’s interpreter and route guide when she was still a teenager. The Corps of Discovery had been accompanied by Sacagawea for twenty-one months, from 4. Nov. 1804 to 14. Aug. 1806. Sacagawea turned out to be incredibly valuable to the Corps as it traveled westward through the territories of many tribes unknown to the Caucasians.

The facts about Sacagawea were “discovered” by Eva Emery Dye (1855–1947) in Dye’s work, *Conquest: the True Story of Lewis and Clark* (1902). Since then, Sacagawea has been a heroine in histories, works of fiction, plays, films, and visual arts. This paper intends to reveal the real Sacagawea through examination of primary sources and show how her reputation has changed over the years.

Key words; Sacagawea, The Lewis and Clark Expedition, Native American